

■ 先週のメッセージ ■

「キリストのうちにとどまること」 重枝 覚子主任牧師

聖書箇所 ヨハネによる福音書17章22節

「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」

心から捧げる賛美の中で悔い改めが起こり、許しを受け取り、神様は心をきれいにしてくださる。神をほめたたえ、生きる苦勞が生かされている喜びに変えられる。人は礼拝するものに似てくる。全知全能の素晴らしい神様の似姿に変えられていく。神は全てを見ておられ、日曜日の朝、起きて礼拝に行く最初から最後まで見ておられる。教会に行くということは、建物に行くのと違う。教会は神に召し出された者の共同体。一人一人はキリストの体。地方教会が集まると、世界中のキリストの普遍的な体である教会となる。私たちは今日も共同体を形成し、新しくここに教会を作った。誰かが欠けていてはできない。

人間は霊と魂と体で作られている。魂と体は一体。人間の霊には良心があり、イエス様を信じた時にそこを入り口として聖霊様が入ってくださり、原罪を無いものとしてくださる。罪人であった時に信じた。魂の部分はまだ古いまま。信じる時には、救われたい、欠けを埋めたい、助かりたい、赦されたい等自分の理由で信じる。罪の自覚がなければ、救われない。罪人であったことは良かった。神様は多く赦し、多く愛してくださっている。霊的には義とされたが、信じたばかりではまだまだきよくなれないが、神を求める心を起こさせ、へり下りにつながる。「もっと神様が必要、私を変えてください。」これを神様は喜ばれる。霊的な飢え渇きがある時は求めが強く、あれもこれも神様のためにしたい、福音を伝えたい等、大きな喜びがある

第一ヨハネ2：6

神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

この御言葉には二つの要素がある。キリストの内に留まるということと、キリストが歩んだように歩むということ。これはクリスチャンの二つの恵み。切り離すことはできない。

ヨハネ15：4-5

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

キリストの内にある生活とはキリストのようになる、ということ。「私に留まりなさい」とはイエスというぶどうの木につながっていなさいということ。そうすることで天から下る喜びは、口では言えない喜びとなる。イエスに従ってイエスが歩んだように歩む時、人間からの誉は必要ないので人間関係から自由になってくる。イエスのように不思議なわざをなし、人々を祝福し、御国を広げ、赦すことができる。イエスのように神の国の權威を持って大胆に堂々と歩みたいなら、イエスに留まることが大切。留まることなしにイエスのようには歩めない。イエスを愛するということは十分にイエスに留まるということ。そのためには、自分自身を明け渡し、自分に死に、自分を捨てる。そうしないとイエスに留まることはできない。明け渡してないことが、イエスの内に留まりイエスのように歩むことを困難にする。イエスのようにポジティブに歩むことに困難を感じる。そうして自分が十分にイエスに留まってない、明け渡していないということに気づく。

イエスはご自分の血を持って私たちを贖い、悪魔のわざを打ち壊すため十字架で死んでくださった。人間は自由意志で悪魔の誘惑を良しとしてしまったが、イエスは救うという正義を持ち、生贄となって命を捧げてくださった。そうでなければ私たちの罪は赦されなかった。イエスは全き正しい人であり完全に神に仕えた。私たちが古い罪の性質をもったまま神に仕えて行くと、無理が生じてくる。イエスという木に繋がってはず、留まっていないのに、イエスのように歩もうとすると困難やストレスが生じる。信仰が楽しくない。信仰とは本当は楽しいもの。ごく単純にイエス様に繋がっていることが重要。イエスから栄養をいただく。これはとても簡単なことで、礼拝して、神に栄光を帰す。救われた時は皆、自己中心の思いで信じた。「イエス様が私の主であり、イエスを崇めたい」とだんだん思うようになる。人間には

神を求める心はある。神を崇め、神様に栄光を帰すのは聖霊の思い。聖霊様に導かれ神を賛美し、礼拝することが大事。

宣言：「イエス様、私はあなたを誉めたたえます。なぜならあなたは神の神、主の主、王の王であり私はあなたに繋がっています」

これは聖霊の思い。聖霊によらなければイエスを主と告白できない。「だからもう肉によって歩まず、御霊によって歩もうではないか」――神を崇める時、肉で歩いていない。聖霊の力が働く。肉の力はまだまだ強いが、賛美し、礼拝する時、肉のように歩まず、イエスのように歩むようになる。そのためには、私たちが強い願望に捉えられる必要がある。聖霊の願望は御霊によって歩むこと。私たちの側も強い願望によって「イエスのように歩みます！」という思いが必要。それと共に、意思による慎重な選択の結果、「キリストのように歩むことがベストだ！」という強い願望に捉えられる必要。聖霊の思いは強い。この宇宙を作った神の思い。宇宙で一番強いお方の願望が私たちの中に生きている。イエスのように生きる。「はい、主よ！」と答え、内なる聖霊様と同じくびきを負って歩いて行こう。イエスのうちに留まるなら、イエスが取った以外の行動はとらない。彼のうちに留まる決断をした人は、イエスが持っていた力を全て与えられる。イエスが愛したように、癒したように、全ての力あるわざを受け取ることができる。私たちの内側に力があるのではない。努力でもない。弱い時にイエス様が力をくださる。自分の力でそれをしようとしても、何も起こらない。「私には何の力もない、イエス様がぶどうの木で私たちは枝です。私たちには何の力もありません。あなたの力をください」とへり下った時に力をくださる！
イエスのうちに留まって、イエスのように生きる決断をしたならストレスはない。イエスが100%働いてくださるので、自分以上の働きをすることができる。「私に留まっているなら多くの身を結ぶ。」とイエスは言われた。

<祈り>

イエスに留まるものはイエスが歩まれたように歩みます。感謝します。私はイエスの内に留まってイエスが歩まれたように歩みます。それを毎日繰り返します。いつもそのことを覚えて祈ります。主よ、私はあなたのうちに留まりますから、あなたにあって満ち溢れた喜びを命の力を私は得ることができます。

私はあなたの栄光のためにではなく、自分の慰めとか、成長のためにあなたに留まることを求めてきました。悔い改めます。私はあなたの栄光のためにあなたに留まります。あなたに完全に似せられることにより、父なる神に仕え、従います。あなたがなされたように、自分自身を神に委ねる人だけが天のものを成し遂げることができると信じます。ですから、私に天のものを十分に下し、私を通して日本に、東京に、私の家庭に、私が分け与えることができるようにしてください。あなたが歩まれたように歩むため、自分自身をあなたに委ねます。あなたのうちに完全に留まります。キリストが歩まれたように歩む。このために、自分自身をあなたに委ねます。幸いなる主よ。私はあなたにより頼みます。どうかあなたご自身のみわざを私のうちに完成してください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン！

■今週（4/16～22）の聖書通読箇所 ■

エレミヤ書46章～ダニエル書10章

16日	日	エレミヤ書	46～	哀歌	3
17日	月	哀歌	4～	エゼキエル書	8
18日	火	エゼキエル書	9～18		
19日	水	エゼキエル書	19～28		
20日	木	エゼキエル書	29～38		
21日	金	エゼキエル書	39～48		
22日	土	ダニエル書	1～10		

旧約聖書 過越の祭りの起源

”新しい粉のかたまりのままに、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の子羊キリストが、すでにほふられたからです。ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種の入らない、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。”（第一コリント5:7-8）

過越の祭りは神がイスラエルの民をエジプトから解放したことを思い出し、祝う祝宴です。ヨセフがエジプトを飢饉から守った後（創世記41章）、イスラエルの民はエジプトに客として迎えられ住んでいた。数百年の時が流れ、エジプト人はヨセフのことを忘れ、イスラエルの民を奴隷にした（出エジ1:6~14）。労働と苦役を課せられ、イスラエルの民は激しく悩み、主を呼び求めた。主は彼らの嘆きに応えられ、パロとエジプトの力に対抗するリーダーのモーセを立てた。出エジプト記は主がどのように神の民をエジプトから自由にしたかを記している。パロの心が頑ななので主は10のわざわいを起こしてエジプトを懲らしめられた。（出エジ7~11章）しかしながらパロは主が天地のまことの神であることを認めるどころか、怒り心頭してイスラエルの民を今まで以上に迫害した。その一つとしてイスラエルの民にわら（レンガを生産する重要な材料の1つ）を与えずに困らせた。しかしエジプトの王でも神を否定することはできない。結果、わざわいが続き悩みはイスラエルの民からエジプトの民へ移った。パロの頑固さの代償を国民が支払うこととなった。最後のわざわいは、死の霊が全エジプトを襲い、すべての長子（人も動物も）が死ぬということであった。しかし、イスラエルの民には、神のわざわいがイスラエルの全家を過ぎ越す夜に、死から逃れる道を与えた。それは主がモーセに特別の指示を与えたことで、（出エジ12章）その指示とは傷のない子羊をほふり、その血をかもいに塗るということ。傷のない子羊の血が家族で最初に生まれたものの命の代わりとなるのである。また、イスラエルがエジプトから速やかに出発するために、種なしパンを作り、苦菜を用意することを命じた。いつでもエジプトを離れるために、イスラエルの民はこの食事を立って食べなければならなかった。この祝いは過ぎ越しと呼ばれている、なぜなら神が子羊の血が塗られた家を”過ぎ越した”からである。過越の祭りは代々守るべき永遠のおきてとして繰り返し行われてきた。

以下に注目

>旧約聖書の中に書かれた起源は過ぎ越しのお祝い

>過ぎ越しの祭りの象徴とイエスがどのように働くかの予表



出エジプト12章	キリスト
12:1~2 —イスラエルの民にとって新しい始まり、新年の祭り	キリストにあって信じる者は皆、新しく創られた者（第二コリント 5:17）古いこと、古い生き方は過ぎ去った。
12:5 —（ユダヤ歴の最初の月である）ニサンの月の10日に一歳の雄羊が連れてこられ、その子羊は傷がないか、しっかりと調べられた。欠陥がなかったなら、ニサンの月の14日に屠（ほふ）られた。	キリストは以下の者たちによってしっかりと調べられた ・ピラト（マタイ27:11~26、ルカ23:1~6,13~25、ヨハネ18:28~19:16） ・ヘロデ（ルカ23:8~12） ・アンナス（ヨハネ18:12~13,19~24） ・カヤパ（マタイ26:57） 彼らはキリストに欠陥、誤りを見つけられなかった。キリストは”傷もなく汚れもない子羊”である（第一ペテロ1:19）
12:6 —神の民の全集会はいけにえを捧げるために一同に集まる必要があった。	キリストの十字架は、イエスを信じる（=キリストの体の一部となることを求める）全ての人のために必要であった。（ロマ書3:21~26）
12:7,12,22 —いけにえにされた子羊の血は家の入り口に塗られた—二本の門柱と、かもいに。 血による覆いによって、神のわざわいから免れるためであった。	キリストはイエスを信じる者を救うために血を流された。私たちは神のみ怒りから救われるために神の子羊の血潮によって覆われ、罪赦される必要がある。（ロマ書3:25,5:9）キリストは世の罪を取り除く神の子羊。（ヨハネ1:29）
12:14 — 過越の祭りは代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。	最後の晩餐の時、イエスはパンを取って「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい。」とはっきりと口にした。（ルカ22:19）
12:46 — 神はイスラエルの民に子羊の骨を折ってはならないことを命じられた。	イエスの死を早める為にローマ兵はイエスの足の骨は折ろうとしていた。しかし、イエスはすでに死んでおり、イエスの骨は折られずに済んだ。（ヨハネ19:32~33）